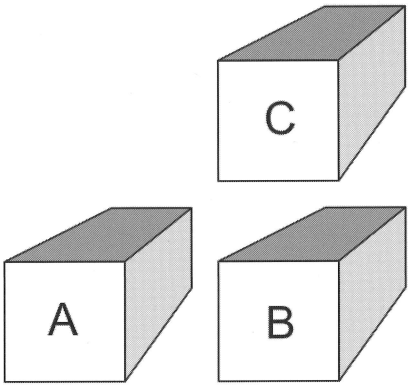
斜塔錯視の謎

北岡明佳



錯視コンテストというものがある。二〇〇五年の夏、スペインのアコルーニャで開かれた視覚研究の国際学会（ECVP）のお楽しみ行事としてスタートし、二〇〇七年はアメリカの学会（VSS）の余興として、五月にフロリダで第三回が開催された。一等賞を取ったのは、マギル大学のキングダム教授らの「斜塔錯視」であった。この錯視は、ピサの斜塔を斜め下から撮影した写真を二つ横に並べると、同じ写真なのに斜塔の傾きが違って見えるというものである（http://illusioncontest.neuralcorrelate.com/）。

キングダム教授らによると、この錯視の原因は、線遠近法における消失点の不一致である。二枚の写真を一つのシーンとして認識すると、二つの塔の輪郭の消失点が一致しないということは、塔の方向が同じでないことを意味するから、この傾き錯視が起こるという。

図のAとBを比較してみよう。二つの「直方体」は物理的には同じ形に描かれているが、AよりもBの方がより右に向いているように見える。次は、図のBとCを比較してみよう。この場合は、BよりもCの方がより上に向いているように見える。それらを合わせて考えると、CはAよりも右上に向いているように見えそうであるが、実際には両者は同じ形に見える。AよりもCの方が大きく見えるが、これはジャストローの台形錯視か回廊錯視の一種である。

もともとAは右上を向いているのだから、右変換と上変換で右上変換になるから元に戻る、という二次元的な考え方を取れば説明できる。しかし、それだとキングダム教授の三次元的な説明とは一致しないと思うのだが、いかがであろうか。

（きたおか・あきよし　知覚心理学）